

シェイクスピア劇とローマ史の人物像 — プルタルコスを中心に —

(Ⅵ)

『アントニーとクレオパトラ』論（その三）
アエノバルブス、ポンペイウス、レピドゥス

木 村 輝 平

シーザー 私はレピダスがあまりに残酷になり
己の高権を濫用したので、その
報いを受けたのだと伝えさせた。

（3幕6場 32～34行）

(Ⅰ)

『アントニーとクレオパトラ』はシェイクスピアの技量が円熟した時期に書かれただけあって、曲中にはアントニーやクレオパトラなどの主人公をはじめとして、きわめて見事な性格描写がなされている人物が多い。ただ、その演劇的機能という点から見るといちばん複雑で面白いと思われるのはアントニーの部下、エノバーバスである。

彼は他の人物たちとは違い、睨めた見方で皮肉な、冷笑的な言葉をしばしば発する。よく注意してみると、彼の言葉は予言的あるいは注釈的役割を持つこともあるように見える。しかし、だからと言って、彼の役柄は傍観者、解説者といった機能に限定されるわけではない。他方では、彼にはどこか、ひょうき

んなところが感じられるし、また、彼自身の人間的感情の表出も——いつも素直な形とは限らないが——随所に見受けられる。したがって、彼はかなり変わった人物ではあるけれども、それでもやはり、いわば演劇の人格を具えた一個の登場人物であることは確かであろう。

しかしながら、彼が上に述べた複雑さを示すのは劇の途中までであって、後半になって、彼がアントニーを見捨てて去るエピソードの結末では良心の呵責に悩む赤裸な人間という面がもっぱら強く出ている。この最後の境遇でのエノバーパスと前半での彼とはきわめて対照的であって、そこには一種の落差というべきものが感じられるかも知れない。このことはたとえば次に並べた二つのせりふを較べることで感じ取ることが出来よう。

それなら、神様に感謝をお献げになることですな。神様が亭主から女房をお召しになる時は、まるでもう、服屋さんってとこですな、古い服がすり切れりゃ、新しい候補があるってわけですから。ファルヴィア以外に女がいないのでしたら、この度のことは痛手で、嘆くべきことでしょうけど、この悲しみには慰めが乗っかっているってことですよ。あなたの古い上っ張りが新しいベチコートになるって寸法なんで。じっさい、こんな悲しみには玉ねぎで涙を出すことですな。

(1幕2場167~177行)

おお、人の悩みの支配者たる月よ、
夜の湿った毒気を私に注ぐがよい、
わが心に逆らって生命が私につきまとわぬように。
わが心臓を非情な石の如きわが罪に打ち当ててくれ、
悲しみで乾いて、それが粉と砕け、
悪しき思いを終らせるように。アントニーよ、
あなたの気高さは私の恥ずべき謀叛以上だった。
あなただけでも許してくれるとよいのだが、
世間が主人を見捨てて逃げた者共の仲間
この私を数えても、それは当り前だ。
おお、アントニー アントニー。

〔と言って死ぬ〕

(4幕9場12~23行)

このように、シェイクスピア劇ではエノバーバスは一応の比重を持つが、プルタルコス「アントニウス伝」ではこの人物（Domitius Aenobarbus）に関する記述はごくわずかである。

彼の名前が出てくるのは合計3箇所、まず最初はアントニウスがパルティア遠征をした際、失敗に気落ちした彼に代ってアエノバルプスが演説の代行を命ぜられたという話である（40節）。次に出てくるのは、アントニウスがいよいよ小カエサルと事を構えた時、彼はクレオパトラの参戦に反対したという話である（56節）。最後のものは、アントニウスの陣営からのアエノバルプスの逃亡とそれに続く死である。

また、彼はアエノバルプスに対して、クレオパトラの意向に反してまで、親切に紳士的に振舞った。というのは、熱病にかかりながらも彼は小舟に乗ってカエサルの陣営に移ったからである。アントニウスはこれをおおいに嘆いたが、それでも彼の許に荷物や、従者、部下を送ってやった。このドミティウスは自分のあからさまな反逆を悔いていることを彼に告げるかのように、間もなくすぐ死んでしまった。

（63節）

プルタルコスのこの記述と『アントニーとクレオパトラ』でのエノバーバス逃亡の経緯とを比べてみると二つほど相違点があることに気付く。ひとつは時期の問題で、プルタルコスではこの事件はアクティウム海戦前のことであるが、シェイクスピアでは海戦よりずっと後の話になっている。また、もうひとつは彼の死因についてである。ノースの訳を綿密に読めば、ドミティウスが後悔して死んだかも知れぬというのはあくまでも書き手の修辞で、じっさいには、彼が後悔していたかどうかはわからぬし、またその後悔故に、死んだのかもわからない形になっている。^①むしろ読者にはその熱病のせいではないかと思える。しかし、シェイクスピアでは印象の強いその修辞的部分を採って劇化しているということができよう。

ところで、上のエピソードの中心をなすアントニウスのアエノバルプスに対

する寛大な振舞いはそれ自身感銘深いものであるが、じつは、プルタルコスでは同じような美談の先例が「ユリウス・カエサル伝」の中に述べられていて、読者には2度もでてくることでいっそう記憶に残るということもあるかも知れない。それは大カエサルとポンペイウスの間に内戦が生じた時のことである。

またその頃、カエサルのよき友であり、ガリアの戦いでは副官をつとめ、カエサルのために勇敢に戦ったラビエヌスも同様に彼を棄て、ポンペイウスの許に走った。しかし、カエサルは彼の金と持ち物を送り届けた。その後、彼はコルフィウムの町の前に陣を張った……。

(34節)

この話は『アントニーとクレオパトラ』とは直接関係はないわけであるが、ただ、まったく関係ないかと言えば、そうも言い切れないかも知れない。というのは、この劇の1幕2場で、使者が「重大な知らせでございます。ラビエナスはパルティア軍を率いてユーフラテスからアジアに侵攻し、彼の軍旗はシリヤからリディア、イオニアにまではためいております」とアントニーに告げるのだが、このラビエナスとは先の逃亡したラビエヌスの息子なのである。もちろん、このことはシェイクスピアがそこまで意識していたかどうかということとは別問題である。因みにパルティア軍のラビエヌスはアントニウス軍の將軍ヴェンティディウスに敗れて戦死したとプルタルコスの「アントニウス伝」に述べられているが、シェイクスピア劇のヴェンティディウスは戦いからの帰りの3幕1場で彼のことには触れていない。^②

(Ⅱ)

『アントニーとクレオパトラ』の中で、先に扱ったエノバーバスに対するアントニーの雅量を示すエピソードと並んで、同じように強い印象を残すのはセクスタス・ポンペイと部下のミーナスの間の騙し討ちをめぐる問答であろう。2幕7場でポンペイの軍艦に招かれたシーザー、アントニー、レピダスらが酒

宴に我を忘れていた時、ミーナスはポンペイに錨を切って船を沖に出し、三人を殺して天下を取ることを勧める。これに対してポンペイの答は次のようなものである。

ああ、それを言わずに、実行してくれていたら！
私がやれば悪事だが、お前ならば忠義だったのだ。
よいか、心得ておけよ、私にとって
先立つのは損得ではなく、名誉だとな。
お前の舌がやるべきことを告げてしまったことを
悔むがよい。知らぬうちに片付けていたら、
私は後でよくやったと思ったろう。しかし、今となっては
咎めるだけで。忘れて飲むがよい。

(2幕7場79～86行)

このせりふは、例によって、プルタルコスに基づいていて、そこでは書き方はシェイクスピアのものより簡略だが、主旨はまったく同じである。このエピソードの面白さは説明するとなると難しいが、まず「建て前」と「本音」という日本語の概念が浮んでくる。これで言うと、ポンペイは権力の独占という本音はあるものの、守るべき建て前のところはきちんと一線を引いて守っている。そのけじめの見事さが面白いのではなからうか。またもうひとつ、「腹芸」という言葉も浮かんできて、これでは、ポンペイは責任者の自分が背德的行動をとることなしに最良の結果が来るように、ミーナスが腹芸で処理すればよかったと言っているのだということにならうか。こういうことを言うポンペイがずるいのは確かだが、しかしまた、これは権力を争う者としてはごく自然な心境という面もあり、その意味で味わいのあるエピソードである。

さて、自分の建言を拒けられたミーナスは、ポンペイの理屈には理解を示さず、次のような傍白をつぶやく。

それなら、私はもう
お前の下り坂の運命とはおさらばだ。

求めているながら、差し出されたものを
取らない奴にはチャンスはないのだ。

(2幕7場87～90行)

このミーナスの考えは古代ローマの考えよりもむしろ、エリザベス朝の運命観を反映しているように思えるが、また同時に当時の演劇によく現われるマキャベリ型悪漢の色彩をミーナス自身に与えるものにも思われる。

ところで、その後ポンペイの運命はどうなったのか。このことは『アントニーとクレオパトラ』という演劇にとってさして重要ではないけれど、劇中に言及がないわけではない。それは次の箇所である。

エロス シーザーとレピダスはポンペイと戦争を始めました。

エノバーバス それはもう聞いている。結果はどうなのだ。

エロス シーザーはポンペイとの戦争では彼を利用しておきながら、すぐに対等の地位から下ろして、勝利の榮譽にはあずからせずじまい。そればかりか、ポンペイに以前手紙を送ったことで攻撃を加え、自ら告発して彼を逮捕しました。それで、哀れな三巨頭の一角は、死んで釈放になるまで監禁中という次第。

エノバーバス 〔略〕

エロス アントニーは庭を歩いています。こういうふうにも目の前の草を払い、「レピダスの馬鹿め」と叫び、ポンペイを殺した部下を生かしてはおかぬと怒っております。

(3幕5場4～19行)

すなわち、その後ポンペイはシーザーとレピダス相手に戦争をし、敗れて、最後はアントニーの部下に殺されたことになり、まさにミーナスの予想通り、運命は下降線をたどったことになる。

この経過は実は史実通りなのだが、それについてシェイクスピアは何に拠ったのかということになると、問題はやや難しくなる。というのは、上のセクストゥス殺害の事実はシェイクスピアが通常素材として用いたプルタルコスの「アントニウス伝」には書かれておらず、またもちろん、「ユリウス・カエサ

ル伝」,「ブルートゥス伝」なども時代が違い、問題にならない。そこで、これはふつう、ノース訳の『対比列伝』中に加えられた「アウグストゥス・カエサル伝」に由来するものと考えられている。この伝記はプルタルコスによる正伝とされる諸篇とは違い、ノース訳の第三版(1603年以降)に初めて他の14篇とともに付け加えられたもので、プルタルコスとは別人の筆によるものである。

この伝記にはカエサルとレピドゥスがセクストゥスと戦争を行った経過がくわしく書かれているし、また、セクストゥスの死については次のような言及がある。

……一方、アントニウスの副官ティティウスはサモス島に逃げていたセクストゥス・ポンペイウス(当時40歳)を捕え、アントニウスの命令でこれを殺害した。

『アントニーとクレオパトラ』のほとんどの版の注釈ではシェイクスピアの典拠としてこの一節が引用されている。^③ しかし、これと先のシェイクスピアからの引用部分を較べてみると、両者を結びつけるのは、やや飛躍があるような気もする。というのは、エロスの報告ではアントニーはポンペイを殺した部下にひどく腹を立てているからである。これが意味するところは、ポンペイを殺したのは彼の命令ではなかったことになる、でなければ殺させておいて後で後悔し、部下に責任転嫁の八つ当たりをしているかであるが、これは上の記述とは離れてしまう。もちろん、シェイクスピアがそういうふう書き直したと考えればそれでいいのだが——そして、その可能性も否定はできない——、しかし、他の部下が勝手にポンペイを殺してしまったとする史書があるならば、一応それを考慮してみたいくなるのは当然であろう。その史書というのは、アッピアノスの『ローマ史』とディオの同じ題名の著作でそこではポンペイウスが殺されたのはアントニーの部下の一存によるものであった可能性や、あるいは、命令の行き違いによるものであった可能性などが述べられている。^④ ディオの場合にはおまけに、先のエロスの言葉に符合して、レピドゥスが相手方のポン

ペイウスと秘かに連絡を取ったなどという表現も見受けられる。^⑤ 他方、アップianosのものはすでに1578年に英訳が出ていたので、これが直接シェイクスピアの素材となり得たわけではあり、その他にもこの劇ではそれが典拠である可能性が浮かぶ箇所が、二、三ある。ただ、それらの類似性はいずれも微妙であって、この問題同様、それだけでつながりを断定するにはやや力が足りないもののように思える。この辺が『アントニーとクレオパトラ』の典拠探しの最前線というか、あるいは終着点であろう。

(Ⅲ)

三頭政治家の一角レピダスは『アントニーとクレオパトラ』において、きわめて卑小な人物に描かれている。彼はアントニーとシーザーの間で仲を取り持つことにきゅうきゅうとしているが、自らは二人の大人物と肩を並べるべくもないごく凡庸な人物のように見える。劇中のレピダスの描写のほとんどはシェイクスピアの創作によるものだが、シェイクスピアはミシーナム沖の船上での場面での彼の酩酊ぶり（2幕7場）や他の人物の彼への評価の低さを示したりして（2幕7場 および3幕2場）、ことさらレピダスという人物の貧弱さを印象づけているかのようである。そして最後には、前章の引用中に見たように、彼はポンペイと内通したかどで、シーザーによって、その地位を追われたことが明らかになるのである。ところで、レピダスの地位剥奪についてはもう一箇所この劇では言及がある。それはこのことをアントニーに詰問されたシーザーが、彼に与えた返事に関連したものである。

私はレピダスがあまりに残酷になり、
己の高権を濫用したので、その
報いを受けたのだと伝えさせた。

（3幕6場32～34行）

よく考えてみると、この理由は上のエロスがアントニーに伝えた原因とは明

らかに異なっている。この食い違いをどう考えればよいのか。もちろん、よくある合理的解釈を用いれば、たとえば、エロスまたはシーザーのどちらかの言葉に嘘偽がある（あるいは韜晦がある）、というふうに捉えて、その人物の心理を分析すればよい。しかし、こう説明すればなるほど理屈は通じるが、じっさいはそこまで整合性を考えていないのがシェイクスピアであり、シェイクスピア劇というものであろうと筆者は考える。というのも、劇場という状況で考えれば、この程度の矛盾は認識されることはほとんどあり得ないということがあるからである。

素材面から言えば、この相違はシェイクスピアの用いた典拠の相違の反映として容易に理解される。レピダスがセクスタスと内通した疑いの方は先に述べたように、「アントニウス伝」の中には述べられておらず、例の「アウグストゥス伝」やディオまたはアッピアノスの著作などが典拠の可能性として考えられる。他方、シーザーが主張した理由は「アントニウス伝」の記述をほぼそのまま踏襲したものである。

オクティヴィアス・シーザーは彼に次のような返事を送った。レピダスについては、なるほど彼の地位を奪い、支配地も取り上げたが、それは彼があまりに残酷に彼の権力を揮ったからである……。

（傍点は筆者。55節）

ところで、この箇所にはもうひとつ別の問題が隠れている。それは先に引用したシーザーの主張の中の、レピダスが「あまりに残酷になり」(grown too cruel) という部分である。すでに述べたように、この劇に現われるレピダスはなるほど卑小、凡庸な人物ではあるが、悪党じみたところはないし、まして残酷な人間とは思えない。どちらかといえば、善良で心やさしい好人物といった趣きがある。3幕2場でレピダスは弟のシーザーと別れを惜しむオクティヴィアに「満天の星があなたの行く手を照らされんことを」と美しい思いやりの言葉をかける。それ故、「残酷」という言葉は——歴史上のレピダスはどう

であれ——この劇でのレピダスに関しては奇異な感を免れないのである。

ニュー・ケインブリッジ版のD・ウィルソンはこの部分について、「これはシェイクスピア劇では嘘偽のように思える、というのはそれは穏健なレピダスともっとも結びつきそうもない欠点であるのだから」と言っている。またニュー・ペンギン版のE・ジョウンズは同様に、「これはプルタークにのっとっているけれど、シェイクスピアのレピダスについてはあまり納得がいかないものに思える。これはこの劇に多いが、登場人物が他の人物について語ることをわれわれが信ずるに及ばない場合のひとつである」と言う。難しい問題を含んでいるので、両者とも微妙な言い廻しをしているかのようだが、いずれも「残酷になり」の信憑性の薄さを指摘していることは確かである。

ただ、この問題も素材面を掘り下げてみるとごく簡単な答えが出てくる。この箇所のプルタルコスの記述の訳は先に示したが、ここではノースの英文を参考のために引用したい。

Octavius Caesar answered him again that, for Lepidus, he had indeed deposed him and taken his part of the Empire from him, because he did *overcruelly* use his authority……

(イタリック体は筆者)

さて、この文では‘overcruelly’という言葉がシェイクスピアの‘grown too cruel’の根拠になったと考えられる。ところが、念のため、これをさらにアミヨの訳まで溯ってみるとどうであろうか。

César lui répondait, quant à Lévide, qu’il l’avait déposé voirement, et privé de sa part de l’empire, pour autant qu’il en abusait *outrageusement*……

(イタリック体は筆者)

シーザーは彼に答えて言った。なるほど私は彼の地位を奪い、その支配地も取り上げたが、それは彼がそれをひどく濫用したからである……。

(傍点は筆者)

すなわち、アミヨの訳においては、‘overcruelly’にあたる言葉は‘outrageusement’が使われていて、これは英語では‘immoderately’とか‘excessively’の意味であったと考えられるから、何らかの思い違いによる、ノースの誤訳であろう。これが結局、シェイクスピア劇のシーザーの言葉に反映したことになる。なお、他のいくつかの史書ではレピドゥスがカエサルに地位を取り上げられた原因は、彼がカエサルの風下に立つことを潔しとしなくなり、ポンペイウスとの戦争の終り頃から自己の権利を主張してカエサルに反抗したことにあつたようである。これがブルタルコスでは上のアミヨのような表現に形を変えたと思われる。因みにロエブ版の表現もアミヨのものと同じ趣旨になっている。したがって、資料面からはノースの不注意な‘overcruelly’という訳語が『アントニーとクレオパトラ』のレピダスが「残酷になった」原因であることは間違いないであろう。

もちろん、この考察に対しては、いったん完成された劇作は素材とは独立したものであって、それ自身の世界内での考察のみが有用であるという至極もつともな批判が予想される。これはたしかに正論ではあるが、だからといって、真正直にレピダスに残酷な性質があつたと考えることも、あるいは逆に、シーザーは思いつきの出鱈目を返事するような無責任な人間であつたと合理的解釈を下すことも、行き過ぎであろう。じっさいは、そのどちらでもないようなあいまいなものに思える。先にも同じことを言ったが、綿密に見れば不合理であっても、通常、劇の観客には気にならない程度の矛盾、あいまいさはシェイクスピア劇では珍らしくはないと思う。先の二人の編者の言葉、特にE・ジョウソンの場合は、このような見解に沿つたものであると思われるが、どうであろうか。一般に、筆者などは上のような考え方をシェイクスピア劇に接する場合の健全な常識だと思うが、とかく合理主義解釈に傾きがちなシェイクスピア学にあつては、このような素朴な考えを主張することにはある意味では勇気のいることなのである。

(1982年10月)

注

- ① ここの事情はロエブ版でも同じように書いてある。
- ② ただし、正確には、ラビエヌスが戦死したのは、この場面で報告される戦闘より少し前のことになるが。
- ③ New Clarendon 版では次に述べる Appian との関連の可能性が指摘されている。なお、Appian との比較はいく人かの学者によってなされている。
- ④ Appian では「内乱篇」，Book V, Chap. XIV, § 144 中に。Dio では Book XLIX, § 8 中に。
- ⑤ Book XLIX, § 8 中に。